

同朋大学佛教文化研究所報

第 26 号

発行日 平成二十五年三月二十九日
編集・発行 同朋大学佛教文化研究所

代表者 小島 恵昭

〒四五三・八五四〇

名古屋市中村区稲葉地町七の二

TEL (〇五二) 四一三一 三三三

FAX (〇五二) 四一三一 三六九

e-mail : bc-inst@doho.ac.jp

(題字は池田勇諦元学長)

『ブッダのことはを伝えたい』『ブッダに学ぶとらわれない生き方』『不安を鎮めるブッダの言葉』『超訳ブッダの言葉』『ブッダと始める人生が全部うまくいく話』これらはいずれも二〇一一年以降、今日まで実際に出版された書籍の題名である。著者も出版社もそれぞれ異なる。『ブッダに学ぶゴルフの道』というものまである。

しばらく前までは、だいたい書店で「宗教」や「仏教」のコーナーを覗いてみても、親鸞・道元・日蓮といった鎌倉期の宗祖たちや、『法華経』『般若心経』『阿弥陀経』といったメジャーな大乘経典についての解説書や入門書が大部分を占めているのが常だった。それが最近では「ブッダ」「ブッダの言葉」を冠した題名の本が何冊も平積みで並べられていて、ちょっととしたブームの感がある。

インドから中国に伝わって漢文化され、日本を含む東アジア一帯に伝播した大乘仏教は、無数の仏・菩薩が登場する壮麗な世界を示して信仰を集めたが、反面その天文学的スケールや非現実的な描写に現実感希薄である。他方、スリランカやビルマ、タイなど東南アジアに伝えられた上座部系仏教は、あくまでも歴史上の人物である仏教の開祖ゴータマ・ブッダ(釈尊)の言葉(とされる教え)のみを聖典と見なし、実直な出家修行を実践の基礎に置いてきた。現実主義と出家生活へのこだわりゆえに「小乗」とも貶されたが、日常生活に根ざし、素朴な中に深い洞察をちりばめた教えの数々は、きわめて現実的な生活の不安に満ちた今日、最も求められているものなのかも知れない。それになによりも、これは仏教そのものの開祖である釈尊の教え、原点なのである。実際、冒頭に挙げた著作の多くに「ブッダ(の言葉)に還れ」という

ブッダのことは何処にある

同朋大学文学部部長 福田 琢

スローガンを読み取ることができる。

その気持ちは分からなくもない。私自身、そこに仏教の「原点」があると思っただから、初期のインド仏教を専攻し、研究を続けてきたのである。しかし結局のところ、それもひとつの思い込みだった。釈尊が「くなられてまもなく、高弟たちが集成した聖典が、今日の上座部の聖典の起源であり、それゆえに現存する資料のなかで、最もブッダその人の言葉に近い、という伝承は、あくまでも、僧団が自身の正統性を権威づけるために語った因縁物語に過ぎない。また近代仏教学はそれらの資料を文献学的な手法によって新古の層に振り分け、とくに『ダンマパダ(法句経)』や『スッタニパータ』といったいくつかの韻文(偈)形式の諸篇を「最古の仏教聖典」と見なしているが、これも決定的ではない。私は最近、これら最古の原始仏典が、『阿弥陀経』や『法華経』のような初期大乘仏教経典に対して、「ブッダの言葉」としての確かな優位を主張できるかどうかが、はなはだ怪しむようになっている。原始仏典のなかにも、大乘仏典のなかにも、留保なしに「ブッダの言葉」「ブッダの教え」である、と見なせるような言説は、おそらく存在しない。ただそれらの言説を解釈するための、合理的で首尾一貫した体系に基づいて、ブッダの教えを再構築することは可能と思う。そしてそのような解釈の体系は、たとえば「宗義」というかたちで、それぞれの宗門の伝統の中に遺されている。

初期の経典に遡れば、簡単にブッダその人の教えに触れることが可能であるかのような錯覚が横行している。伝統的宗門はいま宗義を踏まえた「解釈」の重要性を正しく訴えるべきではないかと思う。

《研究所新収史料紹介》

寛政六年東本願寺門跡達如大僧正転任御礼参内行列図

一卷 卷子（紙本著色） 縦二七・二cm、全幅八三四・七cm

松金 直美

本行列図は、寛政六年（一七九四）正月二十四日、東本願寺二十世の達如（一七九二〜一八四六）が同月十三日に大僧正へ転任した御礼のため禁裏へ参内した際の行列図である。

- ・警護徒士十五人
- ・大坂講中十二人
- ・東本願寺家臣六人（松岡与左衛門、岡田大右衛門、大柳新治、加藤新吾、岡野伝右衛門、笹岡友五郎）
- ・大童子八人（磯部主一郎、村田他吉、川那部文之助、七里橋江、松尾為藏、森川□太郎、横田九一郎、ほか一人）
- ・妙誓寺、性智坊、円成坊、本行坊、大量坊、楳定坊、道量坊、蓮藏坊、園林坊、南窓坊
- ・前駆房宮（下間大藏卿法眼）
- ・候（井上要人）
- ・四方輿（輿持十人）
- ・候（粟津日向守）
- ・上童（為王丸・加賀専光寺）
- ・介添一人
- ・房宮（下間治部卿法印）
- ・布衣（池尾伊織、石井隼人、藤井中書、宇野宙八、野崎弥兵衛、遠藤濤、宮崎金吾、川部登、安藤甚十郎、ほか三人）

- ・扈從僧（光尊院、ヒラノ恵光寺、フルハシ願得寺、カモノ慈敬寺）
- ・素袍士十四人（洛陽 七講・五日講）
- ・雑々士十二人（小谷宗太、土藏兵庫、松木定之丞、市野石見、狩野求馬、樋口播磨、白瀬善治、平井善左衛門、狩野内匠、森村五郎兵衛、中尾壹較）
- ・御沓持（下部頭九郎兵衛）
- ・御傘持（鏈頭友七）
- ・素袍御百士十四人、白丁小者頭一人の群行
- ・笠籠六人
- ・押三人
- ・沓持八人
- ・挾箱持六人
- ・傘持三人

まず「警護徒士十五人」と詞書きされた一行からはじまる。ただし、前欠のため、十四人のみ描かれている。そして「大坂講中十二人」、東本願寺家臣六人、東本願寺家臣息の大童子が続く。大童子は八人描かれているが七人のみ名前が記載されている。さらに僧侶十人が連なる。門跡達如が乗っていると考えられる四方輿は十人で担いでいる。輿の前と真横には候の家臣が一人ずつ、さらにその前後に法体である坊官の下間氏が一人ずつ配置されている。

介添えを伴って四方輿の後ろを歩く加賀専光寺の為王丸は、専光寺乗覚の次男であり、同十年（一七九八）に小松本覚寺へ入寺した達含（一七八一〜）十四歳の童形であることが、『大谷一流諸家分脈系譜略』〔本證寺蔵〕三卷所収「専光寺譜」と十九世紀半ばにまとめられた神田信久著『大谷嫡流実記』から明らかとなった。

その後、布衣を着した家臣十二人、五箇寺を含む扈從僧、素袍を着した洛陽の七講・五日講の十四人、家臣の雑々士十二人と続く。布衣姿の家臣九人、雑々士十一人については名前が記されている。

さらには、杵持、傘持、笠籠持、挟箱持などの従者が連なる。総勢一五二人にのぼる大行列である。行列に加わる人びとのこやか表情からも、祝儀のにぎにぎしい様相が伝わる。

前欠であることもあるためか、どのような行列を描いたものであるか記されておらず、当初不明であった。しかし小山正文氏（研究顧問）のご教示により、「専光寺譜」の憲盛（達含）の項に「同廿四日参内童形参役勤之、十四、同月廿七日得度三位」、『大谷嫡流実記』の達如の項に「同六甲寅年正月十三日転任大僧正十五歳 同月廿四日御礼参内アリ」とあることから、寛政六年正月二十四日に、東本願寺門跡の達如が同月十三日に十五歳で大僧正へ転任した御礼のため禁裏へ参内した際の行列図であることが判明した。

本行列図は、蒲池勢至氏（客員所員）より、研究所へご寄贈いただいた。ここに記して感謝申し上げます。なお、研究所の設立三十五周年記念として開催した二〇一二年度後期展示「仏教文化研究の展開―法宝物・書物・行列図―」（十一月十四～二十一日）において公開した。

本願寺の行列を描いた絵図には、「天保九年西本願寺門跡広如関東参向行列の図」「東本願寺大門御供養会御庭儀行列之図」「東本願寺親鸞五百五十回忌御遠忌画図」など、さまざまな事象を取り上げたものがある。その形態も、冊子や一紙・継紙の刷物、軸装された絹本など、種々に渡る。その一例を、二〇一二年度後期展示の四章「描かれた本願寺行列」にて紹介した。これらからは、当時の本願寺をとりまく人びとの構成を、装束を含めて可視的にとらえることができる。「描かれた本願寺行列図」が流布することは、実際に行列を目の当たりにした人びとのみならず、さらに多くの人びとへ本願寺の権威性を伝えることになったであろう。また後世に法要や行列のあり方を敬承していくためにも重要な役割を果たしたものと考えられる。



《研究余滴》

『諸神本懐集』について

黒田 浩明

真宗と神祇の関わりを主題としたテキストの代表格として、『諸神本懐集』を挙げることができる。二〇一二年度の「真宗列祖」研究会では、この『諸神本懐集』の検討を通して、真宗と神祇のあり方について考察していくこととなった。

『諸神本懐集』は、本願寺三世覚如の長子、存覚による著作である。仏光寺の実質的開祖である空性房了源の請いにより著した、『浄土真要鈔』『女人往生聞書』など、いくつかの典籍のうちの一つであり、真宗における神祇思想を述べたものとして知られている。

この書の写本は室町末期のものを中心に多数現存しており、その最古のものは応永三十二年（一四二五）八月の日付を持つ上越市高田の浄興寺所蔵本であるとされる。また、永享十年（一四三八）に存如の署名を持つ写本の跋文には、元亨四年（一三二四）正月、存覚三十五歳の時に、当時流布の本を添削して製作されたものであることが記されている。

本文の冒頭には、神祇に対して本地垂迹説の見地から押さえることを提起して、権社の霊神、実社の邪神、諸神の本懐について、三段に分けて論じていくことを述べる。

この書は阿弥陀仏を本地とする本地垂迹説に基づき、日本各地で祀られている諸神について、仏菩薩の垂迹である権社と、人類・畜類などが神格化したたりをなす実社の邪神というように二社を分別する。ここでは、仏菩薩と日本（とくに鹿島・香取・箱根・三島などの関東の神に詳しい）の諸神の關係性が詳述されている。そして、権社の神の本懐が、衆生をして阿弥陀仏へと帰依せしめることにあると結論づけられる。

『諸神本懐集』は、跋文にあるとおり、何らかの底本に依拠しながら、真宗の視点で整理しなおされてものであると考えられる。そこでの底本がどのようなものであったかが従来課題とされてきたのであった。『諸神本懐集』には源空述とされる漢文本が流布しているが、これは実際には後に製作されたものと目されている（同じく存覚による『破邪顯正鈔』や『法華問答』が仏光寺教団において後に漢訳されている例などから考えて）。したがってこの漢文本が底本であったとは考えられない。

このことについて宮崎円遵は『諸神本懐集』の内容的特徴として、①関東を中心に叙述されていること、②熊野権現と阿弥陀仏の本迹關係を中心とすること、が挙げられるとする。そして、その二点が真宗の神祇思想と直接關係があるものではないから、存覚が底本を添削するにあたって、特に加筆する必然性が無く、元来の底本の段階で存在した特徴点であろうと推測している^①。それ故に、『諸神本懐集』の底本は、信仰の特徴として上記の二点をもつ時宗系統の典籍であろうと述べている。

一つの説として、隆寛門下の信瑞が建長八年八月信濃諏訪明神の氏人中原敦広の質疑二十五箇条に答えたとされる『広疑瑞決集』が底本であるという、浅井了宗の見解が挙げられる。浅井の指摘を整理すると『広疑瑞決集』と『諸神本懐集』には次のような共通点が見いだせるという。まず、①権社・実社の分別をすること、②諸仏・菩薩の方便に折伏門・摂取門があること、そして③諸仏・菩薩は神明の本地であり、みな念仏をすすめているとする、というような点においてである。

ただし、『広疑瑞決集』五巻のうち、『諸神本懐集』と関連する内容を持つのは三巻と四巻のみであって、全体の論旨における対比では、その二本は共通性がない。それ故に浅井は、『広疑瑞決集』そのものが『諸神本懐集』の底本になったというよりは、三、四巻の内容をまとめた著作が存在し、その一本が『諸神本懐集』の底本になった「日来流布之本」と考えるべきであろうと推論しており、宮崎ら多くの先学もその説に同

意している。

北西弘はこうした先行研究を踏まえ、真宗における神祇との関係性を記した『神本地之事』なる一本（長野県上田市の向源寺所蔵）が、浅井の指摘する『広疑瑞決集』と『諸神本懐集』をつなぐ書物であり、『諸神本懐集』の底本ではないか、という説を立てている。³⁾

とはいえ、『神本地之事』は『諸神本懐集』との成立時期の前後関係も明確ではないうえ、『広疑瑞決集』に存在する、諸仏・菩薩の方便に折伏門・撰取門があることなどの内容が表れておらず、つなぎの一本であるという根拠も薄弱である。もちろん北西説の可能性も否定はできないが、断定するには難しい説であるだろう。

このように、書誌学的な観点から『諸神本懐集』の底本がどのようなものであったかが問われてきたのであるが、当研究会においては本書の記述内容に関する側面からも、底本がいかなるものであったのかが大きな研究課題であった。特に、従来の書誌学的研究では余り注目されていないが、本書で示される日本開闢の神話は、『古事記』『日本書紀』などのそれと内容に大きな隔たりがあるほか、各神社の縁起説話なども、現在目にする事が出来る縁起絵巻などの内容とは異なる内容を多く含んでいるからである。存覚がそれらに関する情報をどのような経緯で編纂したか、ということは審らかではない。したがって依然『諸神本懐集』の底本の問題は未解決であると言わざるを得ない。

以上、二〇一二年度の「真宗列祖」研究会では『諸神本懐集』に取り組んでみたが、底本について可能性があると思われる資料にたどり着くことができなかった。現段階では新規性のある内容を提示できないので、研究余滴としてここに報告する。

(註)

(1)宮崎円遵「諸神本懐集の底本の問題」(同『真宗書誌学の研究』、永田文昌堂、一九四九年)

(2)浅井了宗「浄土教に於ける神仏交渉発達論―広疑瑞決集と諸神本懐集に就て―」(『宗学院論輯』三六、一九七六年)

(3)北西弘「諸神本懐集の成立」(『真宗史の研究 宮崎円遵博士還暦記念』、永田文昌堂、一九六六年)

《研究会活動報告》

「日本仏教の成立と展開」研究会 活動報告

脊古 真哉

「日本仏教の成立と展開」研究会（小島恵昭・大山誠一・黒田龍一・脊古真哉・吉田一彦）では、各研究参加者の研究領域・関心を基礎に、幅広く日本仏教・日本宗教に関わる問題を取り上げてきている。二〇一二年度には、二〇一二年七月七日に絵画史料研究会との合同研究会を、二〇一三年二月六日・七日に現地踏査を実施した。

七月の研究会では、同時に開催されていた仏教文化研究所前期展示「地獄・極楽」および同日に開催された鷹巣純氏の講演会とも連動させて、脊古の「感生説話のひろがりから見つめた〈聖徳太子の誕生〉」の報告が行なわれた。研究会のメンバー以外にも、講演会の参加者の一部を含め、活発な議論が展開された。なお、来年度の前期には「聖徳太子信仰」についての展示が予定されており、これまでの研究成果の一端を発表する場としたいと考えている。

現地踏査は、二月六日には、昨年兵庫県の鶴林寺・東光寺の修正会の調査に引き続いて、新春行事の調査として、奈良県桜井市の大神神社の御田祭を見学した。さらに六日午後から七日にかけて、談山神社、長岳寺、多神社など、奈良盆地南部の寺社を踏査した。

中国日本仏教思想史研究会 活動報告

藤村 潔

二〇一二年度研究会の開催、参加者については次のとおりである。

・開催日	1/24	2/24	3/28	4/25	5/23	7/25
	8/29	10/24	11/14	12/12		

・参加者 玉井威、藤村潔、飯田真宏、市野智行、高木祐紀、中川剛、花榮、廣田万里子

本研究会では、『大正大藏経』にある『大乘起信論』（以下『起信論』と称す。馬鳴菩薩造 真諦三藏訳）を定本とし、『起信論』の漢文と岩波文庫（宇井伯寿・高崎直道訳注）を輪読する。輪読を通して種々の課題を提起し議論している。そうした中で、当研究の特色は『起信論』を精読することにより、『起信論』の思想を精緻に分析し、整理することにある。二〇一二年度は『起信論』を最初から読み始め、正宗分の解釈分まで読み進めた。

『起信論』では、覚（さとり）や不覚（迷い）について、細分化された分析されている。本研究会では、そのような細分化された用語を拾い集め、図式化することを試みている。多くの『起信論』の参考書では、用語説明は詳しいが、その用語の位置づけが必ずしも明瞭ではなかった。そのため、研究会では様々な用語を系統立てて図式化することによって、細分化された用語の意味や位置づけを理解しやすくしている。

『起信論』には阿梨耶識という語が出てくるが、東アジアの仏教ではそれを真妄和合識と規定される。研究会の中で、このような考え方は原始仏教にはないという指摘があった。このことから、原始仏教にはなかったものが『起信論』に至って創案された思想であると判明した。また『起信論』には「熏習」が説かれている。熏習の例として、衣服自体には香りはなくとも人が香をたきしめると衣服に香りがつくというもの

である。その熏習には無明が真如に働きかけて妄心を生ずるという過程がある。この点は『起信論』に見られる熏習の特徴であることが明らかとなった。

二〇一三年度も引き続き『起信論』を精読し、研究をしていきたい。

「真宗列祖」研究会 活動報告

黒田 浩明

二〇一二年度は次のとおり、研究会を実施した。

・開催日	5/1	5/22	9/25	10/9	10/23	10/30
	11/13	11/27	1/22			

また、通算第三回目となる研究発表会を次のとおり、実施した。

- ・日時 一月三十一日（木） 一五時三〇分～一六時三〇分
- ・会場 博聞館H319教室
- ・テーマ 『諸神本懐集』の研究
- ・発表者 小島恵昭、川村伸寛、黒田浩明、村上亘（同朋大学大学院博士後期課程満期退学）

この研究会は、大谷派の真宗学者においては比較的とりあげられることの少ない列祖の教学および思想に焦点を当て、その時代教学性を探求し、翻って現代の真宗人としてのあり方について考えることを目的とする。発表会では、通年で研究してきた内容である、存覚の著書『諸神本懐集』について、各人のテーマにしたがって発表した。

研究発表の内容は、①『諸神本懐集』の書誌と研究のねらい、②『諸神本懐集』から見る本地垂迹説、③『諸神本懐集』の宗教多元主義的評価、④『諸神本懐集』と箱根権現、であった。各発表後、簡単なまとめと質疑応答を行い、内容を深めた。

二〇一三年度も存覚の著作をとりあげ研究会活動を行う予定である。

真宗史研究会 活動報告

安藤 弥

第一回目(通算第二六回)

【日時】六月一四日(木) 一四時〜一六時三〇分

【題目】近代仏教史の問題点―高木顕明復権のプロセスから―

【報告者】中川 剛氏(客員研究員)

第二回目(通算第二七回)

【日時】一二月六日(木) 一四時〜一六時三〇分

【内容】『天文日記』にみえる伊勢・美濃・尾張・三河

【報告者】安藤 弥(所員)

本年度の第一回目は、中川氏の研究報告で、大逆事件に連座して投獄され、教団から排斥処分を受けた高木顕明の名誉回復のプロセスという課題から、近代日本仏教史の多様な実態について、問題提起がなされた。第二回目は、安藤の研究報告で、本願寺十代証如の日記『天文日記』における伊勢・美濃・尾張・三河の記述を通して、戦国期本願寺教団の地域の実態について史料検討をした。

二〇一三年度も引き続き二回程度の研究会活動を予定している。

アジア仏教研究会 活動報告

武田 龍

・開催日 6/4 10/12 1/28 3/5

・参加者 武田 龍・玉井 威・宮崎保光・藤村 潔・中川剛マックス
『法華経』(岩波文庫)を信解品まで読み進んだ。信解品では、釈尊が舍利弗に授記をするという事態に驚いた出家教団の高弟たち(須菩提・摩訶迦旃延・摩訶迦葉・摩訶目犍連)が、方便の教えを真実の教えと思い込んで無上の完全なさとりを求めようとしなかったことを告白し、師

の真意を取り違えた自分たちを窮子(貧窮した息子)に譬えて、「長者と窮子の譬喩」を物語る。この譬喩物語は長行(散文)の後ろに同じ内容の偈を伴い、重頌(again)の形式である。

釈尊の説法は次のような過程を経て聖典化された。最初期の仏弟子たちは、自分の聞いた説法の要点を記憶しやすい詩や簡潔な散文にまとめ梗概要領を作った。これはまだ個々の弟子の記憶であり個人の行為であった。まず説法の梗概要領が作られて記憶に保存され、口伝された。

次に、出家者を統々と受け入れ教団(サンガ)が拡大すると、各自が保持している梗概要領を整理し統合する必要が生じた。仏滅直後に第一回の聖典編纂会議が行われ(第一結集)、サンガの運営と比丘の行動規範を教える律と、教理を説く法がまとめられた。梗概要領の共有化が図られ、まとめられたものは聖典とされ、サンガが伝承することになった。仏教が広まり弟子が増えるに従い、簡潔な要領に説明や解釈が付加されるようになる。それに特定の文学形式が与えられた。やがて、内容と形式により分類されて、九分教・十二分教が成立した。最も古い聖典の分類法であり、以後聖典としての真偽をはかる基準とされた。これは大乘経典にも伝えられる権威ある基準である。ところが、大乘経典はこの基準から逸脱し制約を超えて制作されていく。仏説ではないと批判される所以である。法華経にはこの事情が随所にみられる。

教行信証学習会 活動報告

吉田 暁正

講師:張 偉 先生

趣旨:漢文として『教行信証』を読む

会場:同朋学園Dオペラザ閱蔵2F 多目的会議室

テキスト:東本願寺刊『真宗聖典』(必要に応じて資料配付有)

開催日 4/26 5/24 6/28 7/26 9/27 10/25

11/29 13 1/24 3/28
 本年度は『教行信証』『化身土巻』における「三心」についての問答を中心に学習している。

「問う。『大本』（大経）の三心と、『観経』の三心と、一異いかんぞや。答う。釈家（善導）の意に依って、『無量寿仏観経』を案ずれば、顕彰隠密の義あり。」と御自釈に表される問答から、親鸞がなぜこの問いを立てたのかということを探ってきた。

『大経』の三心（至心・信樂・欲生）は『観経』の三心（至誠心・深心・回向発願心）に通じると善導は解釈し、法然は一なるものと見てきたが、親鸞は顕彰隠密という視点から、顕の意においては異であり、彰の意においては一であることを示し、善導の言葉の重層性を明らかにしていることを学習した。

また、『観経』の三心について、理解を深めるために、「二河白道の比喻」を読み解く学習を行った。特に、白道については、親鸞は、「信巻」では、「白」は「選択摂取の白業」、「往相回向の浄業」、「道」は、「本願一実の直道」、「大般涅槃無上の大道」と如来の働きを意味する解釈をしていることに対して、『愚禿鈔』では、「白はすなわちこれ六度万行、分散なり。これすなわち自力小善の路なり」と自力の歩みを示していることを確認し、この「白道」には、重層的な意味があり、二元対立、分別心を超える道が意図されていることを学習した。

二〇二二年度彙報

○研究所構成員

- 所 長 小島恵昭(社会福祉学科)
 所員・幹事 安藤 弥(仏教学科)
 所 員 北畠知量(社会福祉学科) 木野美恵子(社会福祉学科)
 服部 仁(人文学科) 松金直美(非常勤)

研究顧問 織田顕信 小山正文

客員所員 青木 馨 大山誠一 岡村喜史 蒲池勢至

ギヤナ・ラタナ 黒田浩明 黒田龍二 嘉木揚凱朝
 脊古真哉 武田 龍 玉井 威 藤村 潔 吉田曉正
 吉田一彦

客員研究員 飯田真宏 市野智行 川村伸寛 中川 剛

特別研究員 河村 諒 棚橋めぐみ 松山 大
 (所員会議) 4/10 5/15 6/5 7/17 9/25 10/16
 11/13 12/18 '13 1/15 2/5 3/14

○公開講座等

・「教行信証」学習会(全九回開催:開催日は前掲活動報告のとおり)

・現地で学ぶセミナー

第1回 6/30(土) 葛城山周辺の寺社 講師:脊古真哉

第2回 11/10(土) 近江の仏教文化を訪ねて 講師:安藤弥

・ギャラリー展示

前期 「地獄・極楽」展(7/6~12)

：関連行事 7/7 鷹巣純・愛知教育大学准教授による絵解き

後期 「仏教文化研究の展開―法宝物・書物・行列図―」(研究所

三十五周年記念)展(12/14~22)

○研究・調査活動

・研究会活動(：前掲各活動報告のとおり)

・真宗寺院史料調査

5/22 明法寺(安城市)

5/29・10/4 蓮光寺(津島市)

8/17 照厳寺(福井県あわら市)

9/13 空釈寺(三重県多気郡)・西弘寺(三重県松阪市)

11/1・1/29 雲観寺(半田市)

2/27・28 本宗寺(三重県松阪市)・法受寺(三重県多気郡)

3/4・26 本慶寺(岐阜県海津市)